

令和2年度 学力向上研究指定校事業第2回連絡協議会・報告資料

令和2年度の取組の概要

| | | | | |
|---------|---|--------|------|---------|
| 学 校 名 | 大和中学校区4小学校(吉岡小・吉田小・鶴巣小・落合小) | 主な取組教科 | 算数科 | |
| 研 究 主 題 | <p>確かな学力を身に付けた児童の育成</p> <p>- 「課題設定」と「振り返り」に重点を置いた、学びを実感させる算数科の授業づくりを通して-【吉岡小】</p> <p>- 自ら進んで考え、伝え合う力を育てる算数科の授業づくりを通して-【吉田小】</p> <p>- 既習事項をもとに問題解決の見通しをもたせ、共に学び合わせる算数科の授業づくりを通して-【鶴巣小】</p> <p>- 算数科における振り返りと学び合いを通して-【落合小】</p> | | 研究年次 | 3 / 3年次 |

1 今年度の主な学力向上の取組と成果

| 学力向上の取組 | 成 果 | 評価の根拠 |
|---|---|--|
| 算数の学習に関する4小学校共通の意識調査の実施、変容把握 | 算数を学ぶ必要性を理解し、意欲的に学習しようとする児童が増えた。 | 算数が「楽しい」(大規模校(吉岡小):87.1%,小規模校(吉田小・鶴巣小・落合小)平均値:90%),「大切だ」(大規模校:98.3%,小規模校:100%)という調査結果から。 |
| 町標準学力調査(東京書籍)と全国学力・学習状況調査の実施、結果分析、変容把握 | 学習意欲や標準スコアの向上が見られた。 | 町標準学力調査の同一集団の変容において、学習意欲や観点別標準スコアの向上が見られた学校・学年が多いことから。 |
| i-check(東京書籍)の実施、変容把握、調査結果を生かした指導過程の計画・実施 | 安心感や自信をもって集団の中で活躍できる児童が増えた。 | 自己肯定感や学級適応感等の児童一人一人の内面を客観的に把握できたことで、授業における個別支援や学び合いを充実させることができたことから。 |
| 「自己診断シート」や「授業評価シート」を用いた授業の振り返りによる教員の意識の変容把握 | 授業づくりの観点としたり、授業を客観的に分析したりすることで授業改善が進んだ。 | 東京家政大学山浦秀男先生からの指導・助言を受け、各校の視点や手立てと関連したものに自校化して活用できたことから。 |
| 教員の見取りによる変容把握 | 既習事項を活用しようとする意識の高まりと学びの自覚化が見られた。 | 掲示物や前時までのノート等を参考に課題を解決しようとする姿、適用問題を解決できたことで学びを実感している姿、学びを自分の言葉で表している姿が増えたことから。 |

2 残された課題・要因と今後の方向性

| 課題・要因 | 今後の方向性 |
|--|--|
| 基礎的な学習内容の定着が不十分な児童が見られ、学年が上がるにしたがって学習に対する意欲が低下する傾向が見られる。 | 低学年から基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図り、学習意欲を向上させること、中・高学年での学習を系統的・計画的に積み上げて学習意欲を持続させることで、今後も4小学校が共通で目指す「自分の考えに自信をもち、伝えることができる児童」を育てていく必要がある。 |
| 新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、中学校との連携が不十分だった。 | 中学校との更なる連携を図り、中学校進学後の子供たちがどのように力を発揮しているのか、小学校段階でどのような力を身に付けておくべきなのかといった、小中学校9年間を見据えた教育の在り方を探っていく必要がある。 |